園長通信～こころ～ №８０

国語の力その４

2024.7.30

国語の勉強は、漢字以外はやらなくていい。とにかく読書量を増やすことだ。国語力を伸ばすには、結局のところ読書量を増やすくらいしか方法がない。国語の専門家までもが、このような論を展開していることがある。私が中学生のときのことを覚えている。国語の勉強といったら、漢字しかやらなかった。国語は、勉強しなくてもよかった。だから、楽な教科だった。その分、国語を上げようもなかった。

読書が重要であること自体は、異論の余地はない。多くの本を読んだ方が国語力がつくというのも確かであろう。しかし、読書だけでいい、読書しか方法がないというのはどうだろう。それでは、私の中学時代になってしまう。

もし、本当に読書が有効であるなら、小中学校の全授業に占める国語科の授業時間数の比率が高すぎはしないだろうか。これほど国語の授業が必要なのだろうかとなってしまう。それだけ国語には、ねらいをもった意図的な授業が必要だということであろう。自由な読書だけでいいはずがない。

小学校の国語の授業で考える。『ちいちゃんのかげおくり』などの戦争教材がある。「悲しいね」「戦争はよくないね」などの優等生的な発言で終わってしまうことはないだろうか。『やまなし』などの幻想的な物語ならば、「不思議だね」「美しいね」で終わる。これらは、物語の内容を味わっているだけである。いわば、道徳の授業に近い。具体的には、感想を書かせる、紙芝居にする、音読劇にするなど、いろいろな展開がある。結局は、いずれも味わうことが目的である。

どんな言葉で、どのように書かれているのかといった形式を詳細に検討していく、いわば読み方を学ぶ授業には、めったにお目にかかることはできない。内容重視なのである。この傾向は、説明文を読む授業でも見られる。虫の育て方が書いてあれば、理科のように実際に虫を育てる。ニュース番組のつくり方が書いてあれば、社会科のように実際にニュースをつくる。これらは、国語の授業とは言えない。

書く授業も同様である。読書感想文や運動会などの行事の後に書く作文、その他どんな作文でも重視されているのは、本を読んでいかに感動したか、運動会でいかに団結し、いかにがんばったかといった内容である。書き方、つまり形式は教えてはもらえない。だが、自由に書いてごらんとは言ってもらえる。自主性尊重に見えるが、指導の放棄である。子どもは、どう書けばいいのかと困り、苦しむことになる。こんなことが、今までも、現在でも、多く見られる。残念ながら、これが現実である。